

平成27年度

新宿図書館  
目白大学

第13回  
読書推進プログラム  
入賞作品集



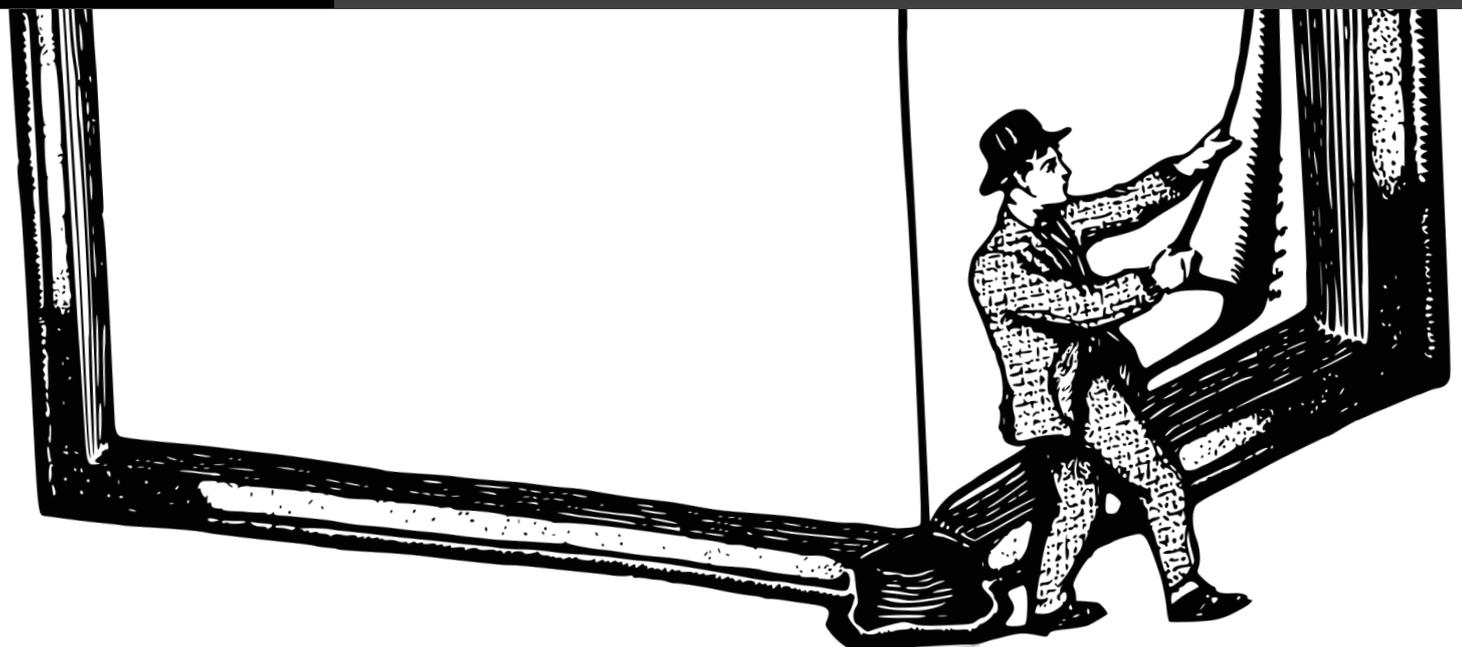




平成27年度

新宿図書館  
目白大学

第13回  
読書推進プログラム  
入賞作品集





## もくじ

受賞者一覧	1
館長講評	2
受賞作品	
一等 「1949年の台湾」から戦争を考える 小川 彩加（中国語学科3年）	6
二等 カウントダウン 満仲 美智子（中国語学科3年）	9
二等 奇跡のリンゴ～「絶対不可能」を覆した農家木村秋則の記録 小澤 みさと（生活科学科1年）	12
二等 戦争を知る 池田 愛美（心理カウンセリング学科3年）	15
佳作 アルジャーノンに花束を 渡邊 あゆみ（心理カウンセリング学科3年）	18
佳作 「理想の人間像」 福田 葵（心理カウンセリング学科3年）	21



## 受賞者一覧

### 【一等】

中国語学科 3年 小川 彩加

### 【二等】

中国語学科 3年 満仲 美智子  
生活科学科 1年 小澤 みさと  
心理カウンセリング学科 3年 池田 愛美

### 【佳作】

心理カウンセリング学科 3年 渡邊 あゆみ  
心理カウンセリング学科 3年 福田 葵

### 参加賞 (応募受付順)

メディア表現学科 4年 川崎 江莉  
心理カウンセリング学科 3年 伊賀利 侑奈  
心理カウンセリング学科 3年 大拙 幸太  
心理カウンセリング学科 3年 佐藤 実里  
心理カウンセリング学科 3年 山崎 紗耶未  
心理カウンセリング学科 3年 小橋 麻有  
メディア表現学科 4年 川島良治  
心理カウンセリング学科 3年 太田 俊希

### 【特別賞】

該当者なし

## 館長講評

平成28年2月3日

初めに、全体像を申し上げます。

手書き応募になって4年目、昨年までの応募数増加傾向が一休みとなり、14編に減少したことが痛恨の極みですが、応募作品は手応えのあるものばかりで、今年は少数精鋭のパターンだと胸を張っていえます。

そのなかで、図書委員の先生方の審査を経て、皆様の作品が入賞しました。

以下、簡単ながら審査結果を申し上げます。

一等小川彩加さんの「『1949年の台湾』から戦争を考える」は、ほとんどの審査員から、最高の評価を得た優秀作です。

中国語学科の学生として留学し、そこで得られた問題意識に基づき本書を選び、400頁もの大作に取り組んで読み通した、そのプロセスからして、まさに大学生の読書姿勢の見本です。合わせて、本学中国語学科の優れた教育力の具現化であり、中国語学科構成員の皆様にご敬意を表します。

小川さんの記述は理路整然としています。初めに、本書に巡り合うまでの経緯を書き、「思い付き読書」・・・これはこれで大いに称賛されるべきですが・・・ではないことを明言しています。本論では1945年前後の混乱から語り始め、著者龍應台の、登場する全ての人々を、「時代に翻弄された犠牲者として描こうとする」とする視点に支えられて、読み進めています。

最終的に、小川さんの主張である、「戦争そのものの本質を見抜こうとする姿勢」の重要性にたどり着くのですが、この間、まさに「息もつかせぬ」迫力で、「青年の気概」を感じさせられました。

そもそも、このプログラムの入賞者決定は、図書委員の総意によるもので、今回は15名で担当しました。個々の審査員の評価は15分の1でしかないのですが、早々と「私としては1位」と明言なさった先生もいました。

評価は匿名でどなたなのか図書館長も存じませんが、この先生にも「一等賞」を差し上げたいと思います。

二等満仲美智子さんの「カウントダウン」ですが、環境学のバイブルともいえる『沈黙の春』に取り組んだ、これも力作です。授業がきっかけであり、大学の教養教育が、発展性をもつ、有意義なものであることを示してくれました。「エコと生産性のときがたい矛盾を指摘してほしかった」とする高度の要求もありましたが、文章については、「力強い」「整然としている」との評価を得ています。「殺虫剤なんて買わない」という決意を潔いとほめても頂きました。実

際、将来において殺虫剤を買わざるを得ない状況になっても、学生時代にこの決意をしたことを忘れなければよいのだと思います。

同じく二等池田愛美さんの「戦争を知る」では、戦争について意識することが少なかった池田さんが、本を読み進めながら、着実に「戦争」と向かい合っていく過程が丁寧に書かれています。今後は、素直に作品に対するのみでなく、たとえば、個人と集合体との共存しがたい矛盾点を意識するなど、さらに、広い視点をもってほしいという指摘がありました。「もう少し批判精神があるとよい」「もう少し掘り下げてほしい」というコメントです。「もう少し」を忘れないでください。

同じく二等の小澤みさとさんの「奇跡のリンゴ」は、無農薬のリンゴを追い続けた主人公の生き方を自分のそれと対比し、丁寧に追跡しています。最後に、懸命に生きる主人公を見習いたいという決意が示され、まさに「1冊の本が人生の指針になる」典型のような、作品になりました。小澤さんの「『奇跡のリンゴ』は『努力のリンゴ』だと思う」という一文には、「とてもよかった」という賛辞と「平凡」という評価がありました。いずれにしても、審査員の関心を惹きつけた点で、キーワードになっていました。工夫は、着目されるのです。15名もの審査委員に読んでもらえる、利点だと思ってください。

佳作の渡邊あゆみさん「アルジャーノンに花束を」は、主人公の心情を丁寧にたどり、自らの感情をその都度振り返る、その素直さが評価されましたが、「素直さ」と表裏一体ともいえる「幼さ」を指摘する意見も複数ありました。

渡邊さんの「涙」の理由が冷静に記述されていれば、より高い評価が得られたかと思います。「感動して泣いた」という記述は、素直に受け入れられ、一点の疑問もないのですが、「なぜ泣いたのか」の「なぜ」がはっきりしないのです。読み手それぞれに泣く理由があるでしょう。複数の審査員が、渡邊さんの「なぜ」を知りたがっていました。

同じく佳作の福田葵さん「理想の人間像」は、実に初々しい文章です。最終部分での「普段、読書習慣がない」という正直な告白も「むべなるかな」と思わされた次第です。

坊っちゃんの正義感を賛美し、他の良さを理解する優しさを評価し、ばあやの「清」にのみ理解される坊っちゃんに寄り添い、坊っちゃんのような人物が社会に少ないことを指摘しなどなど・・・その「幼い」とも言えそうな読みかたが評価されました。むろん、もう少し深い読み方があるだろうとの指摘もあります。あるいは、はるか昔に、その初々しい時期を過ごし、もはや戻れない、審査員の羨望の結果の高評価かもしれません。福田さんの今後の読書生活の充実に期待します。

このように、皆さんの作品は、それぞれの良さを、多くのあるいは、多くはないが、何人かの審査員が確実に認めて、入賞に至った次第です。

これは、惜しくも入賞を逃した応募者全員にいえることです。入賞者との差はまさに紙一重です。もしかしたら、誤字ひとつで入賞を逸したかもしれない、そのくらいの僅差でした。

どうか、また応募してください。そうすれば、だれかが、あなたに共感してくれます。

来年もこのプログラムが続きますことを願っています。ただ一つ、残念なことに、今も申しましたが、誤字や主語と述語の不一致など、文章の基本能力が心配になるような作品が、今年も複数ありました。どうか、その点だけは、ご留意ください。

最後に、館長の「読書の楽しみ」にお付き合いください。昨年もお話したことですが、読書には「意外な出会い」があります。

日本語・日本語教育学科4年生のゼミで、明治時代の女流作家大塚楠緒子の作品を、言語に着目しながら読んでいますが、そこで、「鳩毒ちんどく」という言葉に出会います。毒薬の一種です。

むろん、26万語を集めた『広辞苑』には載っており、日本語・日本語教育学科の4年生として、できれば知っておきたい語です。しかし、ほとんどのハンディタイプの辞書にはなく、ようやく、9万4千語を集めた辞書にあるのみで、「知らなくてもしかたがない」レベルの語だと思っていました。

最近、安部龍太郎の『レオン氏郷』を読みました。知りませんでした、蒲生氏郷がキリシタン大名だったことを。キリシタン大名と言えば、高山右近しか浮かびません。

蒲生氏郷は織田信長の娘冬姫を妻としており、私は冬姫のことを、別の小説で知っているのに、夫の氏郷は、ほとんど知りません。これが、「第一の出会い」でした。日本史専攻の知人に聞きましたら、「氏郷がキリシタンだったことは常識です」と笑われました。

それ以上の出会いは、末尾にありました。氏郷の死に関して、

奥州五十四郡を管領す。惜しむべし、談笑中、<sup>ひそか</sup>窃に鳩毒を置く

とする記録があること、そしてこれが正確ではないことも知りました。

蒲生氏郷毒殺説は、これも日本史専攻の方々には常識のようですが、私には、この「鳩毒」1語の方が、おのれの無知を超越して何百倍もエキサイティングでした。

辞書で、いくつかの用例があるのは知っています。しかし、実際の読書中に、自分の眼で、「鳩毒」に出合った驚きとそのあとの納得感は、忘れられません。

言葉に関心をもつ者にとっての、読書の喜びは、辞書では知っている語と、実際の場面で出合うところにあります。

蒲生氏郷がキリシタンであったこと、毒殺説があったことを今回初めて知りました。これはこれで楽しい出会いです。

しかし、それ以上に、40年も前に大塚楠緒子の作品で出会い、辞書で調べて知ったものの、それ以降、実際の使用場面を知らなかった「鳩毒」という語と、思いもかけず、『レオン氏郷』で遭遇したことの、驚きと充実感こそが、私にとって、「読書の楽しみ」です。

知らないことを知る楽しみのほかに、少し知っていた言葉を思いもかけない場面で確認できるのも楽しみです。それで、手あたり次第の無目的読書が止められずにいる次第です。

とにかく、「知る」ための目的のある読書のほかに、思いがけない出会いをもたらしてくれる読書もあることを、皆さんに知っていただきたいと願いつつ、館長講評を、これで閉じさせていただきます。

目白大学新宿図書館館長 山西正子

一等

## 「1949年の台湾」から戦争を考える

中国語学科 3年

小川 彩加

私は今年の9月まで約1年間、台湾に留学していた。中国語を学びながら、多くの台湾人と交流を深め、名所旧跡や都市の発展など、台湾の魅力溢れる部分を見聞することができた。

一方で、台湾を知れば知るほど、その歴史と民族アイデンティティが、いかに複雑な経緯を経て形作られてきたのか、という目に見えない点が気になるようになった。その複雑さの背景に、かつての支配者である日本が深く関わっていることも実感するようになっていた。

帰国後、台湾の歴史について更に理解を深めたいと考えている時に、本書を知った。本書は、これまで中華人民共和国と台湾の両政府が明らかにしていない1945年前後の国共内戦の実態を克明に描写していることで話題となった。台湾ではベストセラーだが、中国ではいまだに禁書のため、海賊版が売れ続けているという。

1945年に日本統治を終えた台湾にとって、新たな転機となったのは、1949年である。それは、国共内戦に敗れた蒋介石と国民党軍やその家族が、大挙して台湾に流入し始めた年だからだ。その時期のノンフィクションである本書を読めば、台湾社会の複雑さをもっと理解できるのではないかと思った。

本書は台湾人である著者が、結婚したドイツ人との間に設けた息子に、自分の家族の物語を語るという形式をとっている。まずそこで語られるのは、1949年以降、国民党軍とともに台湾に逃れてきた「外省人」とよばれる人々のことである。そのなかには著者の両親もいた。

資料や日記、多数の関係者へのインタビューをもとに、著者は一步一步、両親の過去の事実に向っていく。この時期の中国の歴史について、日本では必ずしも関心が高いとはいえず、中国国民党と中国共産党が起こした内戦の混乱と一言で片づけてしまいがちだ。しかし実際には、このとても悲惨で壮絶な戦争が、膨大な数の「普通の人々」の人生をも変えてしまったことがわかってくる。

本書の最大の特徴は、外省人である著者が、自身の生まれた環境にこだわらず、国民党と共産党、日本と中国、支配者と被支配者といった立場の異なる人々を客観的にとらえていることである。二分法的な視点から善悪を判断するので

はなく、本書に登場する全ての人々を、時代に翻弄された犠牲者として描こうとしている。

内戦で戦った兵士の多くに共通するのは、彼らのほとんどが貧しい農村出身で、本当は戦いたかったわけではないということである。軍隊に入ればまともにご飯が食べられると考えて入隊を決めた青年や、戦況が悪化し人手不足に困った軍に拉致されて、強制的に兵士にさせられた者が数多くいたという。みな食べるため、生きていくために参加しただけだったが、結局戦わざるを得なくなってしまう。

外省人たちの運命はさらに翻弄される。内戦の事実上の敗北により、蒋介石は台湾に向かうが、それに従った多くの兵士たちは、それを混乱から逃れるための一時的な避難だととらえていた。しかし結局その後、冷戦体制のもとで自由な渡航が制限され、1987年に台湾政府が中国への帰省を許可するまでの約40年間、彼らは大陸の故郷へ帰ることはできなかつたのである。

一方台湾でも同じようなことが起こった。1945年以降、日本統治期以前から台湾に住む先住民や漢民族系の「本省人」に対し、国民党は人材を募った。中国語や技術が学べるという内容だったため、将来に悩んでいた貧しい台湾の青年たちはそれを信じて志願したが、実際は兵士として大陸の戦地へ送り出されてしまうこともあったという。その中には、国民党軍として戦っていた途中で共産党軍の捕虜となり、今度は共産党の兵士としてかり出された者もいた。彼らもまた、その後何十年も台湾に帰ることができなかつた。

一般的に戦争では、兵士は大義や愛国心のもと、自国や自軍のために戦うと考えられている。しかし、本書に描かれている国共内戦では、一般民衆にそのような意識はない。「食べるため、生きるため」が目的なのだから、相手軍の捕虜になった瞬間、立場を変え、元々自分がいた軍に対して攻撃することができたのである。

本書を読み、時代の犠牲者を生んだ「戦争の本質」について気づかされた。戦争の本質にある悪とは、暴走してしまった国家権力のことである。国家権力自体に悪はないが、国家権力のぶつかり合いが独裁的国家権力を生み、やがて民衆を戦争に巻き込んでいく。これは、国民党や共産党だけに限らず、戦前の日本や諸外国にも言えることで、独裁的な国家になってしまうと国民は自由を奪われ、巻き込まれ、国家が良からぬ方向へ進んで行こうとしても何も抵抗できなくなってしまうのだ。

本書の内容は国共内戦の物語だけにとどまらない。第二次世界大戦中のドイツをはじめとするヨーロッパの人々や、太平洋戦争中の日本人、日本軍捕虜収容所で日本人として監視員を務めたために、戦後戦犯として裁かれた台湾人、日本軍の捕虜となった連合軍人など、全く立場の異なる人々の戦争経験につ

いても、著者は国家と個人を区別して描いている。たとえ支配者や勝者の側に立つ人々であっても、戦乱に巻き込まれて死ぬこともある。軍人もまた、上官から命令されれば、不本意でも従わなければならない、そのせいで戦犯になってしまう者もいる。彼らもまた同様に、犠牲者であるといえるだろう。

国家と個人を区別して戦争をみるという、筆者のこの視点がとても重要であると私は思う。本書から私が学んだのは、一人一人が過去の戦争を、善と悪、勝者と敗者、正義と不正義といった二分法で裁くのではなく、戦争そのものの本質を見抜こうとする姿勢をもつべきだということだ。私たちは、現在の社会が未来に向かってどう変化し、進んでいくのか、という点を注意深く見なくてはならない。一人一人のその注意深さが、少しでも未来を変えることができるのかもしれない。

龍應台 天野健太郎(訳) 『台湾海峡一九四九』 白水社

## カウントダウン

中国語学科 3年  
満仲 美智子

大学3年生の春学期に、「環境の社会学」という授業を受けた。「水俣病」や「ゴミ問題」などの「公害」を取り上げ、その原因や被害、政策などを学んだ。

授業中、先生がたびたび言及したのが、本書である。この本は1962年にアメリカで出版された。著者は1907年生まれの女性で、大学で動物学を専攻し、海洋生物学者として研究を続けた。1940年代から50年代のアメリカで起きた環境汚染・自然破壊について、化学薬品が与える恐ろしさを告発した先駆者として、全世界に影響を与えた人物である。書名の『沈黙の春』は、化学薬品の乱用によって生物が死に絶え、春になっても鳥のさえずりさえ聞こえなくなる、という意味だ。わたしの20年の人生で、将来そんな春を迎えるなど考えたことはなかった。それに化学薬品というと、理科の実験や研究者が使うような、一般人には入手困難なものというイメージがあった。どこでも手に入る殺虫剤もまた化学薬品のひとつである、ということをおぼえていたのだ。

では化学薬品はどのように恐ろしいのだろうか。本書で詳細に書かれているのは、DDTの毒性だ。むかし日本でもノミ・シラミ・ナンキンムシが媒介する発疹チフスが流行した際、駅の改札口などで保健所の係員が乗降客の頭にDDTの粉をあびせたという。これにより発疹チフスは激減したし、大勢の人間がDDTに触れたが何も変化がみられなかったため、DDTは人体に無害と思われてきた。

確かに粉末のDDTは皮膚から体内へ浸透しないので無害だが、それはDDT自体が無害という意味ではない。実はDDTは油に溶かして使われることが多く、人間や動物も食物を通してDDTを取り込んでいたのだ。

DDTが体内に入り込むと脂肪の多い器官に蓄積されるが、そのなかに生殖器官がある。妊娠中は特に危険で、人間の胎児だと先天性の奇形児が生まれる可能性がある。口に入れたDDTがどんなにわずかでも、体内濃縮により100倍近く増大するのだという。母親の体内のDDTは子孫へと及んでいくから、生命を授かった時点で、すでに化学薬品という重荷を背負っているのだ。

人間が化学薬品を使う理由はいくつかあるが、40～50年代のアメリカにおいては、農作物を害虫から守るための使用が多かった。たとえば農場にDD

Tを散布すれば標的とされた害虫は効率的に死滅させられるが、それ以外にも、DDTを浴びた害虫や農作物を食べた動物もまた毒性を被り、苦しみながら死んでいった。産卵期間中の鳥がDDTを体内に取り込むと、雛は生まれても順調に育たないので、翌春、巣に戻ってくる鳥がいなくなる。まさに「沈黙の春」である。

人間による化学薬品の過剰散布の例として、本書ではアリの一種「ヒアリ」駆除についても述べている。刺されると焼け付くような痛さを感じるため、英語でfire ant（火蟻）と呼ばれる虫だ。ヒアリは第一次世界大戦後、南アメリカから合衆国に上陸した「外来生物」である。合衆国での生息が確認されてから40年、特に大きな被害はなかったが、巣が30cmほどの高さになるため、ヒア리를多く目にする州では「邪魔者」として嫌悪された。

しかしそもそもヒアリは害虫なのだろうか。ヒアリの研究者によると、人体に害を及ぼすヒアリはごく一部で、刺されれば痛いものの、それはハチに刺されるのと同程度の危険性だという。つまりヒアリは駆除の対象外のはずだった。

ところが驚いたことに、殺傷力のある化学薬品が開発されたとたん、政府関係者のヒアリに対する態度が急に変わった。「数が多くて邪魔だから減らしたい」という理由だけで、大規模なヒアリ駆除計画が発表され、対象となる州で大量の薬品が散布されたのだ。結局、莫大な費用がかかり、多くの動物が死に、農務省の信用は失墜するという最悪の事態を招いた。利益を得たのは合衆国の殺虫剤製造会社だけである。「外から侵入してきた虫」に対する人々の過剰反応だったとも言えよう。

さて、最初の出版から50年以上も経った今、本書の内容には現在の私たちからみると、すでに古い情報となっている部分もある。それでも今もなお名著として読み続けられているのはなぜなのか。結局それは、いまだに化学薬品を排除するための解決策が見出せていない、あるいはそもそも人類がそれを見出そうとしていない、ということを実感する人が多いからではないのだろうか。

本書の冒頭には、アメリカの作家E. B. ホワイトの言葉が紹介されている。「私は、人類に対する希望を寄せていない。人間はかしこすぎるあまり、かえってみずから禍をまねく。自然を相手にするときには、自然をねじふせて自分の言いなりにしようとする。」まさにその通りだ。

人間は、自分が住みやすいように、生きやすいように自然を開発し、逆に生きづらくしている。自然には自然のルールがあり、植物も虫も動物もそのルールでバランスを取っているのに、そこに人間が都合のいいように手を加え、自然のリズムを崩していく。「自然」に最も「害」があるのは「人間」なのではないだろうか。今の地球上にはもう、汚染されていないピュアな食物も人間も存在しないかもしれない。人類や動物の全滅も、地球環境の崩壊も、そう遠い話

ではないと私は思う。化学薬品を使うもっと前から、あるいは原子力を使う前から、無数の戦争が起こる前から、人間が地球に誕生した時点で地球崩壊のカウントダウンは始まっていて、刻々と自分たちの首を絞めていることに私たちは気づいていないのだ。人間は何も学ばず、同じ過ちを繰り返している。私もホワイトと同様に、人類に希望を持っていない。絶望していると言ってもよいだろう。

しかしホワイトの言葉には続きがある。彼はこう言う。「私たちみんなの住んでいるこの惑星にもう少し愛情をもち、疑心暗鬼や暴君の心を捨てれば、人類も生きながらえる希望があるのに。」

今のこのちっぽけな私が自然や地球のためにどうあがいても、カウントダウンは止まらない。それでも私は、自分が生きている地球が、自分の子孫が生きていく地球が少しでも良くなるように、長く続くように、今の自分ができることをしたいと思う。まずは殺虫剤なんて買わないようにしよう。使わないようにしよう。

きっと本書の著者にとっても、この本を書くことが「未来のために自分ができること」だったのだろう。この本を読んだ私が、それでも何も行動しないということは、過去の間人たちが犯してきた過ちを「見て見ぬ振り」をする「共犯」になることを意味する。そして何よりも、本書を今後も人々が読み継いでいくというバトンを落としてしまうことになる。

私は地球上の70億人のうちの1人にすぎない。でも私のこの決意によって1秒でも長く地球の寿命が伸び、何十年後か何百年後、地球の命を救える方法を見つけ出してくれる誰かが、1秒でも早く現れてくれればいい。そう心の隅で期待してみる。

レイチェル・カーソン 青木梁一(訳) 『沈黙の春』 新潮社

二等

## 奇跡のリンゴ

～「絶対不可能」を覆した農家木村秋則の記録～

生活科学科 1年

小澤 みさと

「ひとつのものに狂えばいつか答えに巡り合う。」これは無農薬のリンゴ作り  
に全てを捧げた木村秋則氏の言葉である。私は、今まで何かひとつのものに熱  
中することがあっただろうか。確かに熱中することはあった。部活動や習い事  
など、短期間ではあったがその時を一生懸命過ごしていた。しかし、木村氏の  
言葉の中にある「狂う」というほど何かに熱中したことは何も無かった気がす  
る。

自分と木村氏の違いは何かと考えながら読み進めていくと、幼少期から格段  
に違っていった。木村氏の祖父は農業をする人に学問など必要ないという考えだ  
ったが、木村氏は隠れて勉強をするほど学ぶことが好きだった。私だったら、  
そのような環境でも勉強に取り組めただろうかと感じた。跡継ぎの長男が自衛  
隊に入隊したため、次男の木村氏がリンゴ農家の跡を継ぐことになる。そして、  
農薬に敏感な体の妻のために無農薬のリンゴ作りに変更した。

愛する妻の体を気遣って、無農薬のリンゴ作りをするという考えはとても素  
敵だと感じた。無農薬のリンゴ作りは今まで誰もやったことがなく、リンゴ作  
りは農薬が無いと作れないと言われ続けてきたのに、自分が最初に無農薬のリ  
ンゴ作りをするという決意は、私だったらそう簡単に決断できないことだとも  
思った。

無農薬のリンゴ作りを成功させるにあたって、いくつものきっかけや、運命、  
支えなどがあった。きっかけの一つに本との出会いがある。トラクターの本を  
買おうとした時に、はずみで落ち、汚れたため仕方なく買った本が「何もやら  
ない、農薬も肥料も何も使わない農業」であった。この本を手掛かりに人体に  
良い農薬の代わりになるものを試し続けた。黒砂糖、胡椒、ニンニク、唐辛子、  
味噌、醤油、牛乳……。誰もが不可能だと言い、近くの農家の人達は、木村  
氏とすれ違ってもわざと無視をし、気づかないふりをした。もし、本屋さん  
に行った時トラクターの本だけ落ちていたら、無農薬のリンゴ作りは途中で終わ  
ってしまっていたかもしれない。人生どこでどうなるか分からないと思った。

また、周りの農家の人達に無視をされ続けても、耐え続けた力や無農薬の代わりになる食材探しは本当に先の見えないもので、とても大変だったと思う。どんなことがあっても決して諦めないという木村氏の強い気持ちが伝わってきた。また、木村氏の支えとなったのが義父の存在である。唯一、無農薬栽培を認めてくれた人だ。誰一人無農薬栽培を認める人がいなかった中で、義父がやってみるとあっさり言ってくれたことは木村氏の大きなやる気につながったと思う。しかし、順調だったのは最初の2か月だけだった。無農薬のリンゴ作りは、この時から何年も失敗し続ける。次第に家族にもきつく当たるようになり、久しぶりの家族旅行も娘たちは父を腫れ物に触るように過ごしたというほど、木村氏の心は壊れていった。「もう諦めたほうがいいかな」と珍しく弱音を吐いたことがあった。その時、おとなしい娘から「そんなの嫌だ。何のために私達はこんなに貧乏しているの?」と言われ、いつしか無農薬のリンゴ作りは家族全員の夢に変わっていたのだ。娘が言った一言は木村氏にとって大きな力に変わったと思う。そして木村氏をさらにやる気にさせた瞬間だとも思った。木村氏の母は、子供の頃から木村氏の味方でいてくれた。なんでもやってみなさいといつも陰で応援してくれた人の一人だ。どんなことがあっても家族の支えは大きな力に変わると感じた。義父の心の大きさ、最後まで父を信じようとする家族の気持ち、実家の母親の陰の支えなど多くの人々の後押しが木村氏の成功に繋がっているということを身に染みて感じた。

そして、最後のエピソードは衝撃的である。無農薬のリンゴ作りを始めて七年が過ぎた時木村氏はこのまま続けるか、農薬を使った元のリンゴ栽培に戻すか、大きく葛藤していた。しかし、木村氏の心は完全に壊れていた。もうこれ以上生きている意味などないと感じるまでになっていた。森の奥深くまで来たときここで自殺をしようと決めロープを枝に投げた。

その時勢い余って違う方向にロープが飛んでしまった。この出来事は、木村氏にとって大きな運命の別れ目だと私は感じる。その飛んでいったロープを拾いに行った木村氏は、そこで農薬を使っていないのに、立派に実がなるドングリの木に出会うのである。このドングリの木こそ木村氏の無農薬のリンゴ作りの答えになるのである。もしもロープが木に引っ掛かっていたら、木村氏の人生は終わってしまっていたことだろう。木村氏の命が亡くなるということは、無農薬のリンゴを作る人が誰もいなくなるということだ。それに、愛する妻と子供達を残してしまう。残された妻と子供達は、今よりさらに苦痛の生活を過ごしていたことだろう。木村氏が死まで考えた時に、ドングリの木との出会いは本当に奇跡だ。神様は本当にいるのではないかと感じてしまうような出来事だった。「あなたはまだリンゴ農家を続けなければならない。」そう言っているようだ。最後まで頑張る人、諦めない人は最後の最後に救われるのではないか

と感じさせてくれる。また、運もかなり大きいが見ている人は見ていてくれているのではないか。思えば、人間は色々な場面で不可能とされていたことを可能にしてきている。空を飛ぶことを飛行機で可能にしたり、海を渡ることを船で可能にしたりしてきた。私は今まで不可能を可能にするほどではないが、困難な場面では可能な限り頑張ってきたつもりだ。これから進む道でも不可能と思える事や困難なことにきっと沢山巡り合うことだろう。ここで諦めるか、まだ諦めずに頑張るかという判断をしなくてはならないという時この本のことをいつも思い出したい。諦めず頑張ることがすべて成功に結びつくわけでは無い。しかしこの木村氏の本を読んで、どんなことがあっても諦めない姿にこんなにも心を打たれるのはなぜだろう。その人のひたむきな努力、周りの人の支え、そういった取り組みの過程に意味があるのではないだろうか。

ドングリの木からヒントを得て土の大切さを実感した木村氏は、その土を再現し、ついにリンゴの木のうちの一本が七個の花を咲かせた。大豆をまいて三年、無農薬を始めてから八年目の春のことだった。ようやく花が咲き、その後実をつけた喜びはきっと言葉に表せないほど嬉しかったことだろう。

今まで多くの借金をし、家族に大きな負担をかけてきた。自分の命も落とそうとした。しかし、その一方で力になってくれた人達がいる。応援してくれた人達がいる。木村氏の無農薬のリンゴは『奇跡のリンゴ』ではなく、まさに『努力のリンゴ』だと思う。「ひとつのものに狂えばいつか答えに巡り合う」と言った木村氏は、無農薬のリンゴ作りという「ひとつのもの」に出会い、無農薬のリンゴ作りに人生を捧げた。私のこれから進もうと考えている道は、人生を捧げるほどの「ひとつのもの」になるだろうか。これから社会人になると、様々な場面に遭遇するだろう。最後の最後まで諦めないこと、強い気持ちを持っていくこと、自分を支えてくれている人へ感謝の気持ちを忘れないこと。これらの思いを改めて強く感じる事ができた。そして、私も「ひとつのもの」に全力で取り組みたい。

私のこれからの人生を悔いなく私らしく生きるために。

石川拓治 『奇跡のリンゴ「絶対不可能」を覆した木村秋則の記録』 幻冬舎

## 戦争を知る

心理カウンセリング学科 3年  
池田 愛美

今年で戦後70年というニュースが大きな話題となった。しかし、私はそのことについての現実味があまりなかった。戦争はあつてはならないものであるということは思っていたが、戦争というものが具体的にどのようなものであったかということは知らなかった。しかし、日本人として少しでも自分の国の戦争について知らなければならないのではないかと思い、そのきっかけのひとつとしてこの「永遠の0」という本を選んだ。

この本は、終戦から60年目の夏に、主人公の健太郎が特攻隊で亡くなった本当の祖父である「宮部久蔵」という人物について調べていく物語である。そのなかで、宮部が生きること強くこだわっていた男であったということを知る。しかし、なぜ宮部は生きることこだわっていたのも関わらず、自ら命を落としたのか。真実を知るために、かつての宮部を知っている人々に会い、宮部について、戦争について知っていく。この本の特徴として、主人公も戦争などについての知識がないところから始まる。そのため、主人公と共に次第に戦争について理解していくような感覚で読むことができた。また、一般市民ではなく、実際に戦争を経験した軍人の目線で戦争が語られているため、物事がリアルであったと同時に、日本軍がどのようなことを行っていたのかということがよくわかった。

私は今まで、戦争について興味がなかった。歴史の授業で習うことのひとつの事柄であるという程度の認識だった。しかし、この本を読んで、戦争とは非常に残酷なものであるということを知った。また、私は、これまで自分の国がどのように戦争をしていたのかということについて全く知らなかったことを恥じた。それと同時に、この本を通して知ることができて本当によかったと感じた。また、なぜ二度と戦争が起きてはならないのかということを知り、戦争について考えるきっかけとなった。

新聞記者の高山は、「特攻はテロだと思っています。あえて言うなら、特攻隊員は一種のテロリストだったのです。」と言った。私も今までは、多少なりともそのようなイメージがあった。また、「彼らは国のために命を捨てることを嘆くよりも、むしろ誇りに思っていたのです。国のために尽くし、国のために散る

ことを。」このような想いで当時の軍人や兵士は戦っていると今まで習ってきた。しかし、それは間違いであり、偏った考え方であるということを知った。

特攻隊員に選ばれたときは、死の宣告を受けたのと同じである。宣告をされれば人生が終わってしまう。会いたかった人、愛する人、家族に二度と会えなくなり、やりたいこともできず、明日というものがなくなるのである。しかし、当時はそのような状況でも「死にたくない」とは言えない。どれだけ悲しく恐ろしいことなのだろうかと思い、心が痛んだ。そのような中、選ばれた者たちは、後に残る者を思いやり、暗い顔や怖れることを感じさせない態度をとって、家族と愛する人と国のために戦った。なんて心の強い人たちだったのだろうか。なぜ、そのような心を持った人々が死ななくてはならなかったのか。心を強く打たれ、涙がでた。軍人や兵士たちは機械ではなく、ひとりの人間であり、心を持った人であったのだ。また、軍人は熱狂的に死ぬことを受け入れたわけでも、喜んで特攻に赴いたわけでもなかったのだ。このことは、物語の中に登場した人物たちが痛いほどに教えてくれた。

また、宮部はその中でも強い心を持った人であると感じた。死と隣り合わせの世界にも関わらず、軍人は死を恐れてはならなかった。「生きたい」とは思っただけとはいけない世界であった。その中で、宮部は常に「妻と子供のために死ねない」「生きたい」と強く思い続けた。臆病者、非軍人などと言われても「生きる」ことを最優先にした勇氣ある男であった。私は、宮部は「死」を恐れていたわけでもなく、臆病者であったわけでもなかったのではないかと考えた。宮部は確かに「生きる」ことにこだわった。しかし、そのこだわりは、愛する家族を守り、戦うという意味で「死ねない」と言い続けたのではないだろうか。また、宮部に対する非難の声もあったが、一方では宮部の人柄が様々な人の心を打ち、繋がっていく。私は、宮部のような人こそ生き残るべき人であり、戦争で死んではならなかった存在であったのではないかと強く感じた。

このような人を特攻隊に選んだのは日本の軍部であり、国である。高山の言っていた特攻隊員はテロリストという認識は大きな間違いである。特攻隊員は戦争の被害者であると感じた。大本営や軍令部の人間は、懸命に戦っている者たちの命を使い捨てるように扱った。「彼らに降伏することを禁じ、捕虜になることを禁じ、自決と玉砕を強要した」というにも関わらず自分たちは死ぬ心配のない作戦を立て続けた。なぜこのようなことをするのかと憤りを感じた。戦場に立っていた多くの人々は守るべきもののために命をかけて戦っているということを考えなかったのだろうか。多くの命を粗末に扱った大本営や軍令部の人間は心のない人間であると感じた。さらに、その大本営や軍令部の人の責任は問われなかった。当時の日本の非道さを知った。

一方、敵であったアメリカの軍の戦い方は、日本とは大きく異なる部分があった。それは、米軍は非常に軍人の命を大切にしていたところである。日本軍は、「やつらは家庭が第一で、国に帰れば楽しい生活が待っている。やつらは戦争が嫌いだし、なにより命が大事だと思っている国民だ」と馬鹿にしていた。しかし、私はこの米軍の考えこそ大事なことであったのではないかと感じた。日本の軍人も同じことを思っていたと思う。しかし、軍部の上位者がそれを理解しなかった。それが日本が敗れた要因の一つであり、米軍が強く、勝利した要因の一つなのではないだろうか。

このような日本が犯した過ちは、二度と起こしてはならないことであると強く感じた。しかし、現在どれだけの日本人が自分の国の戦争のあり方を知っているのだろうか。おそらく、この本に出会う前の私のように、何も知らない、興味がないという人が多くいるのではないだろうか。私は、この本に出会って初めて自分の国の戦争について知ることができた。この本のおかげで強く心を動かされ、戦争について、自分の国について考えるきっかけとなった。そこで、少しでも多くの人に戦争について自分の国について知ってほしいと感じるようになった。

日本の将来がどのようなになるかはわからないが、多くの命が犠牲にならないように、あのような戦争を二度と起こさないようにするために私たちは、宮部や特攻隊員たちが教えてくれたことを受け継ぎ、忘れないようにしなくてはならないのではないだろうか。

百田尚樹 『永遠の0（ゼロ）』 講談社

佳作

## アルジャーノンに花束を

心理カウンセリング学科 3年  
渡邊 あゆみ

この本を読み始めたときに、まさかこんなに泣くとは夢にも思わなかった。はじめは、ひらがなばかりである上に、句読点もなく誤字ばかりで、読みにくいと文句しか思い浮かんでこなかったからだ。どこまでこの文章が続くのかと少しの苛立ちさえ覚えた。しかし読むうちに、どんどん内容に引き込まれていった。

始めのころ、チャーリーはとても幼くて、ただただ純粋な、素直な人だという印象をもった。利益など関係なく、ほめられたいと一生懸命頑張る子どもそのものと思った。同時に、周りの人の感情を理解できていないように感じた。パン屋でのからかいに対する反応がまさにそうだ。物事をそのまま受け取って、ポジティブに捉え、裏にある感情などは分からない。純粋であるチャーリーには分からなくてもいいのではないかと思うと共に、からかわれていることに気づかないというのはなんだかかわいそうに思えた。

やがて文章に漢字が増え、誤字も修正して書かれるようになると、チャーリーが乾いたスポンジが水を吸うように急速に知識を吸収していることがわかる。本をたくさん読み、経過報告に漢字が増えていく過程は、人の成長を何倍にも早めて見ているようだった。私が特に気に入ったのは、句読点を習った日の経過報告の文章だ。でたらめにおかれている点や丸、疑問符や感嘆符に、思わず声を出して笑った。次の日の経過報告では修正されていて、チャーリーの学習能力の高さを感じさせられた。頭がよくなって、知的に優れた人になったチャーリーだが一方で、他人の感情の理解が苦手だったり、自分の感情を抑えることが難しそうだったりする場面もあった。精神面の成長が追いついていない、ちぐはぐな感じが読み取れた。

中盤にさしかかるころには、チャーリーは今まで自分の周りの人の態度がどのようなものだったのかを理解し始める。そのことにより純粋だったチャーリーは消えていってしまうように感じた。実際に、チャーリーはキニアン先生から「変わった」と言われている。純粋さが無くなり、疑うということを感じたチャーリーを読んでいて、昔は何も疑わずに信じていたが、今は何かと疑いを持つ自分がいたが重なった。チャーリーは、手術が疑うことを覚える一つのき

っかけになっていると思うが、私たちは何をきっかけに疑うことを覚えたのだろうかとふと考えた。

また、中盤ではチャーリーの過去のことが増えてくる。伯父さんに預けられる前のことや、パン屋でのことだ。妹が生まれてから母親の態度が以前にも増してきつくなかったことや、妹から忌避されていたことなど、成長したチャーリーを縛っていることが伝わってきた。一方で、家族の中での父親の態度は、他の家族とは違うように感じた。チャーリーの能力ではなく、本人のことを見ているように思えた。この本に出てくる人物の中で唯一、チャーリーの能力で態度を変えない人だったのではないかと思う。パン屋の従業員は、今まで見下し、からかってきたチャーリーが利口になったのを見て、距離を置くようになっていくし、チャーリーを嫌っていた妹は、兄を嫌っていたことなど無かったかのように振舞っているからだ。パン屋の従業員や妹の態度に、不快感を持ったが、自分もその場にいたら同じ態度をしていたかもしれないと思った。能力を抜きにして本人を見ることはとても難しいが、できるだけそれができるようになりたいと思った。

終盤で、チャーリーはかわいそうとは思われないと書いている。しかし、彼をかわいそうだと思わないほうが難しいように思う。一時は手術により天才になった彼だが、終盤の退行を見ると、彼が不幸に見えてしまう。だが、よく考えるとチャーリーは不幸とは思っていないのかもしれないという考えに至った。手術前は、からかわれていたとはいえ構ってくれる友達(従業員)や、帰る場所があった。手術後は、友達と仕事をなくしてしまったが、利口になりたいという願いが叶った。そして退行が始まってからは、家族に会いに行くことができている。会いにいった結果は幸せとは言えないかもしれないけれど、会いたかったと思っていたことが叶えられたことは、チャーリーにとって良いことだったのではないかと思った。こういうことを考えると、周りから見ると不幸に思えることでも、本人は決して不幸とは思っていないこともあるのだと改めて感じた。

最初から最後まで、チャーリーの視点で話は進んでいく。そのため、チャーリー・ゴートンが本当は実在していて、自分が実験を始めてからウォレンへ行くまでのことを綴ったのではないかという気持ちが今でも捨てきれない。そのこともあってか、読み終えてすぐはなんとも無かったのだが、10分15分と経つうちに、じわじわと涙が出てきて、しばらく止まらなかった。

始め、チャーリーは他人を気にかけることはしていない。天才になってからも、あまり気遣いはなかったように思う。しかし、チャーリーの経過報告の最後の文章が「どーかついでがあつたらうらにわのアルジャーノンのおはかに花束をそなえてやてください」という、アルジャーノンを気遣う文章であったこ

とが印象的だった。どうかウォレンでの生活が、チャーリーにとって不幸でないものであれば良いと心から思う。

ダニエル・キイス 小尾芙佐(訳) 『アルジャーノンに花束を』 早川書房

佳作

## 「理想の人間像」

心理カウンセリング学科 3年  
福田 葵

この度、私が「坊ちゃん」を選択したのは、以前、夏目漱石作『こころ』を読み、今でも心に残っているからです。難しい漢字や昔ながらの言いまわしで、読む際には苦勞した覚えがありますが、内容が深く、感慨深いものでありました。しかし今回の「坊ちゃん」は『こころ』とは打って変わって、どきどきはらはらす展開の痛快ストーリーでした。

作中で坊ちゃんはけんか早く、無鉄砲だと紹介されています。そのため、小さい頃から家族や友人とうまく関係が築けていないようでした。しかし、読み進めていく中で、坊ちゃんはただけんか早く無鉄砲なだけではありませんでした。曲がったことが大嫌いで、間違っていることは間違っていると本人に言うてしまうし、自分が悪かったと思えば謝罪をするような素直な人物でありました。今の世の中には数少なくなってきたと思われる、自分の中に揺るがない信念があり、それを貫き通すことのできる強い心の持ち主でした。私自身にないものをたくさん持っている坊ちゃんは素敵だと思いましたし、見習わなくてはなりません。

物語の中に、清（キヨ）というおばあさんが登場します。坊ちゃんの家の下女であり、唯一の坊ちゃんの味方です。私にとって、この清が作品の中で重要な人物であると思っています。幼い頃の坊ちゃんは清がいるありがたさに気付いていないようでしたが、大人になり、清から離れて暮らすようになってから、やっと清のありがたみに気付いたようでした。こういう時、清だったらこう言うだろうなどと考える場面がよく出てきました。一度だけ清から手紙が来るのですが、そこには、むやみに人にあだ名をつけるな、田舎者はわるい人が多いから気を付けろなど、遠くにいる清は今の坊ちゃんのことを知るはずもないのに、状況にぴったりとあったことが長々と書いてありました。このように、一人でも自分のことをわかっている人がいることはどんなに心強いものかと思えます。家族にさえも分かってもらえなかった坊ちゃんの良さをただ一人清だけは気付いていたのです。

物語の中には、他にも個性的な人物がたくさん現れます。坊ちゃんが働くこととなった舞台の四国の中学校の先生たちにはほぼ全員にあだ名がつけられま

した。タヌキ（校長先生）、赤シャツ（教頭）、野だ、山嵐、うらなり君など、見た目と性格にぴったり合った名前です。坊ちゃんは山嵐と協力して、タヌキ、赤シャツたちをやっつけていきます。坊ちゃんは素直すぎるせいで、タヌキたちに言葉で丸め込まれてしまい、痛い目にあうのですが、山嵐と協力したことにより、最後にはタヌキ、赤シャツたちに勝利できるのです。読み終わったときには、とても爽快な気持ちになっていました。作品の中で、地位の高い人たちは、自分のためであれば、権力を使って周りの人間を動かす、好きなようにしていました。こういうところは、現実世界の今も昔も変わっていないのだと気付きました。しかし、それは間違っていると本人たちに直接言いに行くことができる坊ちゃんのような人物はいるのでしょうか。どうしてそういう人間は、今も昔もあまりいないのでしょうか。一見、協調性がなく、わがままで周りから距離を置かれてしまうような性格の坊ちゃんでしたが、決して間違ったことはしていませんでした。どう考えても、間違ったことをしている上の人がいいたら、しっかり自分の意見を言う、こわいもの知らずでぶつかっていく強い心が、現代の私たちには欠けすぎているように感じます。もちろん私もそんな強い心は持っていません。だからこそ、この「坊ちゃん」という作品に衝撃を受け、心動かされました。無鉄砲に人にぶつかっていくことは、危険をとまいませんが、きっとどこかに山嵐のように同じ気持ちで協力してくれる人がいるはずで、私たちはこれから就職し、社会にでて働かなければなりません。責任を持って仕事をするの大変さももちろんありますが、同じくらいに人間関係を築いていくこともまた難しいと思います。周りに合わせてにこにこし、偉い方の言うことには意見せず、ただうなずき賛成することしかできない気がします。こんな大人にできればなりたくありません。作中に、うらなり君という、人が良すぎて、赤シャツたちに言いくるめられ、遠くの中学校へとばされてしまった先生がいました。うらなり君は裏表がなく、本当に心優しい人でしたが、優しいだけではダメなのだ気付かされました。周りから嫌われることは滅多にないかもしれませんが、いざという時に自分を守ることができないのです。これには気を付けなければいけません。これから社会に出て、数々の間違いや理不尽なことに向かい合わなくてはならない時がくるはずで、そのような時には、坊ちゃんのように、少し無鉄砲に挑んでいき、一度や二度の敗北には屈せず、何度も立ち向かえる人間になりたいと思います。

普段、まったく本を読まないのですが、今回、一冊読み切ってみると、たくさんの素敵な出会いと発見がありました。自分がこのまま成長して、大人になっていったら良いのかということを考えさせられるいい機会になりました。そしてこのままではいけないということにも気付きました。坊ちゃんには、相手の良いところに気付き評価する能力も優れていたのも、そういう部分も含めて、坊

ちゃんを見習っていきたいです。他にも山嵐やうらなり君たちからも良いところを集めて、優しく素直だが、間違っただことが嫌いで、しっかり自分の信念・意見を持っていて、悪いと思ったら心から謝ることのできる理想の人間になれるように、これから努力していきたいと思います。

夏目漱石 『坊っちゃん』 新潮社

平成27年度図書委員

心理カウンセリング学科 (心理学研究科)	原 裕視
人間福祉学科	西澤 利朗
子ども学科	久米 依子
児童教育学科	田尻 信壹
社会情報学科	長崎 秀俊
メディア表現学科	小林 頼子
地域社会学科 (国際交流研究科)	石井 貫太郎
経営学科 (経営学研究科)	高橋 武則
英米語学科 (言語文化研究科)	薬師 京子
中国語学科	胎中 千鶴
韓国語学科	柳 慧政
日本語・日本語教育学科	山西 正子
リハビリテーション学研究科	都筑 澄夫
生涯福祉研究科	須加 義明
生活科学科	林 雅美
製菓学科	庄田 美保
ビジネス社会学科	鈴木 健之
新宿図書館長	山西 正子

2016年2月8日発行  
編集・発行 目白大学新宿図書館